

景観週間2013

景観シンポジウム「歴史・文化を感じさせるまち「荻窪」の景観のこれから」 記録

日 時	平成25年11月17日(日)午後2時15分～午後4時30分	
場 所	荻窪地域区民センター 第1・2集会室	
出演者	基調講演	山田 幸正(首都大学東京大学院都市環境科学研究科建築学域教授、荻外荘周辺まちづくり懇談会委員)
	パネルディスカッション	<p>【コーディネーター】 高見澤 邦郎(首都大学東京名誉教授、荻外荘周辺まちづくり懇談会会長)</p> <p>【パネリスト】 山田 幸正 村田 くるみ(NP 法人すぎなみ学びの楽園) 長瀬 久子(荻窪東町会会長、荻外荘周辺まちづくり懇談会委員) 大塚 敏之(杉並区都市整備部長)</p>
配布資料	<p>シンポジウム次第・出演者プロフィール 荻外荘紹介資料 アンケート 杉並「まち」デザイン賞リーフレット</p>	

基調講演「歴史と文化が創り出す景観」

出演：山田 幸正 氏

首都大学東京の山田と申します。よろしくお願いいたします。

プロフィール内のICOMOS(イコモス)というユネスコの世界遺産の諮問機関、最近ちょこちょこ話題に出っていますが、その国内委員会の理事を務めさせていただいております。杉並区の景観週間で平成19年に講演をされた前野まさる先生が前委員長で、前野先生の薫陶を受けてやらせていただいております。現在は東京大学の西村幸夫先生が委員長を務められておられます。



今日は景観まちづくりというテーマで話を、ということですので、私の知っている事例を紹介しながら、私の考えをお伝えできればと思っております。荻外荘のことはこの講演ではしないつもりです。荻外荘の話を期待されていた方は事前にご了承いただければと思います。

日本の景観まちづくりのあゆみ

最初に、国土交通省のホームページに掲載されている「景観まちづくりのあゆみ」を引用してお話させていただきます。

日本の文化財保存の歴史は比較的早く、明治時代はじめの古社寺保存法から始まります。廃仏毀釈運動で日本の文化が荒れた時代に古社寺を保存しようという法律ができました。これが1897年で、建造物を含めた文化財の保存については一般的には西洋の方が進んでいるという認識ですが、実は日本もそんなに遅れているわけではありません。

日本は19世紀に近代国家として文化財の保護に取り組み始めているということを我々は知っておいた方が良いでしょう。その後国宝保存法や史蹟名勝天然記念物の指定があり、戦後1950年に統合されたのが現在の文化財保護法でありまして、特筆すべきはこの時すでに無形文化財、民俗文化財という概念が盛り込まれ、国として守ろうという姿勢が示されていた点です。無形というものに関しては、最近では日本が音頭を取って無形の世界遺産の指定というのを進めています。文化財保護法制定の時点ではまだ景観という話はあまり出てきておらず、お寺やお城など、いわゆるモニュメントだけを指定対象として扱っており、民家や町並みといった話も出てきていません。

1960～70年代のちょうど高度成長といわれる時代、日本中で数多くの古い建物が壊されていく中で、町並み保存の動きが長野県の妻籠などでみられるようになりました。景観の話として出てくるのは、マンション開発を契機に起こった鎌倉での運動です。これは現在の世界遺産登録運動のもとになっているものだと思います。それがきっかけになって古都保存法ができました。こういうところから、歴史的な環境というものも取り沙汰されるようになりましたが、実際に具体的な法的措置は取られておらず、文化財保護法の中に、町並みを扱う伝統的建造物群保存地区制度が作られたのが、1975(昭和50)年になります。単体の保存から面的な保存の時代に入ったといえます。

1980～90年代はどういう時代かというと、町並み保存から、1996年に登録文化財という制度ができました。50年経過すると文化的・歴史的な価値を持つとみなして守ろうという制度

です。特に外観を重視した建物保存に国が乗り出したのです。これは日本中にかなり増えてきています。

それから2004年に景観法ができ、これを受けて文化財保護法の中に、「文化的景観」というものが盛り込まれました。この景観法というのがどこから出てきたかということ、京都の景観問題で有名になった京都ホテルや、国立のマンション問題というものがあります。こういう問題を受けて、各地で条例を作って独自の景観を守ろう、それを使ってまちづくりを始めようという動きがみられるようになりました。これが90年代くらいです。川越では独自のまちづくり規範を作りましたし、金沢や京都でも景観を守るための条例が出来てきていました。各地で景観に関する条例をつくっているのに、国のほうでは何もしていないのはおかしいということで、各地の景観条例を支える国の法律としての景観法ができました。これが最近の大きな動きとなっております。

こうして最近「景観まちづくり」という概念が一般的になった、と理解しております。

事例紹介～御師の集落～ そのまち「らしさ」を意識した修景

私は首都大学東京（元東京都立大学）にいますが、以前は外国の文化財や萩、川越など、東京以外のものばかり扱っておりましたが、青梅市の御岳山のふもとの御師¹（おし）の集落についてアドバイスがほしいということで、学生を連れて2、3年間調査をする機会をいただきました。東京の方ですと、小学校の遠足などで行かれたことがあるのではないのでしょうか。ここには、御嶽神社に参拝するための講があるのですが、こういう人たちを集めて引率する、半分神主、半分民宿の主人という御師という人たちがいて、その人たちの宿舎を兼ねた立派な茅葺屋根の住宅があります。あの時からすると、今はもっと減ってしまったかもしれませんが、その当方で4棟茅葺きの建物が遺っていました。表門か長屋門があり、その奥に主屋がたつ武家風の雰囲気醸し出している構えをしております。

スライド：御師集落の写真・イラスト 山間地ですので、石垣、板塀というものを多くみることができ、それらも景観の重要な要素として抽出されます。写真を撮り、それをもとに線画を描いてみました。こうみますと、やはり、自然とマッチする景観が重要であろうと考えられます。山の中でぼつぼつと散在しているのではなく、全体の写真を見て頂いてもわかるように、かなりまとまった集村で、折れ曲がった道や坂が登ったり下ったりしている中に家が建て込んでいる、という景観です。樹木などの豊かな自然のほか、風情ある建物、傾斜や坂道、石垣や板塀など、そういうところも景観的な特徴を構成する要素であろう、と分析をし、それを使って景観の保存、修景に役立てられないか、そういうものが「らしさ」ではないかと考えました。この「らしさ」というのがキーワードになります。

ここで、「修景」というものがどういうものかスライドでお見せしようと思います。

スライド：既存の景色を合成で少しずつ変える画像 ガレージの色を変えてみる、塀を少し高くしてみる。電柱を埋設してみる。このように、施工など実施のうえで簡単などころから難しいところまで写真上でシュミレーションしてみました。

スライド：既存の景色を合成で少しずつ変える画像 ここでは、植栽をしてみる、板塀を設けてみる、モルタル塗りの外壁を下見板張りに変えてみる。モルタル塗りの壁を板塀で隠したり、空調の室外機を隠したり、サッシに格子をつけてみたりしました。ガレージのシャッターの部分の塗装を、少し落ち着いた雰囲気に変えたり、道路の舗装材を変えたり、さらには電柱と電線を

¹御師：特定の寺社に所属して、その社寺へ参詣者を案内し、参拝・宿泊などの世話をする者のこと。御師は街道沿いに集住し、御師町を形成する。（「Wikipedia」より抜粋）

とるだけでかなり雰囲気を変えることができます。

事例紹介～東京都西多摩郡日の出町～ ストーリー立てによる文化財の面的保全

御岳山のふもとの町なのですが、西多摩郡の日の出町というところで数年前に、文化財の総合的把握モデル事業というものを行いました。これは歴史文化基本構想に基づくもので、2007年に文化庁の審議会の報告で示されたものです。個々の文化財をバラバラに保存していたこれまでの事業から総合的なものに変え、それを使って地域づくりに役立てようという考えです。そのモデル事業を全国の自治体に募り、結果的に20か所が選ばれ、3年間補助金が付いて実施されました。東京都からは日の出町だけが選ばれ、我々の建築物の調査以外にも、民俗学、宗教美術、石像仏、野生生物、景観と6つの分野でチームを作りました。住民の方にも集まっていたいて、専門家の調査をもとにワークショップ形式で、何が日の出町の文化的事業の柱になるかの話し合いを繰り返し行いました。この事業の大事な所は、点々とある個々の有形・無形の文化財を、あるストーリーを立てて結びつけていこうという点で、総合的なコンセプトに基づくことでした。

スライド：卒塔婆を乾燥させている風景写真等 日の出町は林業の中で卒塔婆のシェアが日本で7割ほどあり、モミノキを使用した卒塔婆づくりは江戸の元禄時代から続いている伝統産業だそうです。この卒塔婆づくりの名家に羽生（はぶ）家というお宅がありまして、中（なか）羽生、上（かみ）羽生、西（にし）羽生と羽生一族の八軒が通り沿いに並んで地区があります。羽生の一族が集まって行う権現（ごんげん）様という伝統行事があります。卒塔婆の木を乾かす場所、稲沢天神のお祭りなど、建造物だけでなく、無形のものも含めたものが一つの柱になるのでは、という話になりました。

現在の青梅線が通るようになって変わってしまったのですが、もともと日の出山を通って行くのが正式な御岳山の参拝ルートでした。ですから、日の出町にも御師の家が日の出山のふもとに1軒だけ残っていました。その近くに民家等には御嶽神社に関連した行事や守り神である狼の御札があったりして、御嶽信仰が今も残っています。そのほかにも、道沿いに大きな石や岩、観音様や地藏様が点々とあり、板碑（いたび）など土着の信仰にかかわるものが数多く見られます。日の出町は中山間地の小さな町ですが、そのなかにかかなりの数のお寺が立地しているのも特徴的です。

昭和初期、日の出町にはセメントの原料としての石灰の採掘場があり、それを運ぶための鉄道も引かれていました。現在は廃線になっていますが、JR五日市線の支線で、終点が武蔵岩井駅でした。このひとつ前に大久野駅という駅があって、この周辺には採掘場で働いている人たちの社宅や病院がありました。病院や社宅はなくなりましたが、幹部の人たちが住んでいた建物が現在も残っています。こうして一時華やいた時期に建設された、公民館や郵便局、床屋さんなどが今も残されています。この床屋さんは現在も営業しています。このセメント産業という切り口から町を語ることもできます。

それから、平井という宿場町が町の中心にあるのですが、周囲には里山があり、川や川原での伝統的な生活文化もみられます。とくにこの町には国の重要無形民俗文化財になっている鳳凰の舞というのがありまして、こうしたことも一つの切り口になります。

さきほども言いましたように、この構想は新しい次元での文化施策ということで、文化財を無形・有形と分類してバラバラに保存するのではなく、総合的に、トータルで保存していこうというものです。トータルで保存するためには、一つのストーリーが必要だという考えです。この考え方は、世界遺産登録でも同じ考え方で進められています。世界遺産登録では Outstanding Universal Value「顕著な普遍的価値」というものが重要で、ストーリー性をもってそれら一つ

一つを証明していかななくてはならないというのが、世界遺産登録の要件になっています。同じように、あるストーリーによって関連づけられた一連の文化遺産を保護・保存していく、そうした活動を通じてまちづくりを進めていくということになります。

まちづくりは文化づくり

最近では文化財から景観という話になってきており、Historic Urban Landscape という概念がとりあげられています。これは、2011年にユネスコの世界遺産委員会から出された勧告が始まりです。この勧告は、中山間部や田園などの景観だけでなく、都市の中での歴史的景観も含めて、どうすべきか、という課題を提示したものです。日本の文化財制度のなかで、建物固有の歴史性についてはかなり厳密に問われてきたのですが、風景・景観について、町割りなどの話はあるにしても、その歴史性自体はきちんと吟味されていませんでした。風致地区や緑地地区などの制度でも、歴史性は問われていません。文化的景観という考え方でも、自然・田園という風景が評価の中心にされていて、その歴史性、その景観はいつからあるのかという点はあまり評価の対象とされてきませんでした。ヨーロッパでは、勧告以前の2000年頃から歴史的風景の characterization 特定ということがされるようになってきています。

都市の中で景観を保存していくということは、何らかの規制がかかることになります。その典型が京都の景観条例です。2007年に見直しをして、「眺望」という概念が導入されました。ここでも「京都らしさ」というものを訴え、東山など周囲の山を見渡すことをねらって、眺望点をいくつか設けました。たとえば、大文字焼きが見える眺望を確保するためには、傾斜して上がっていく地面の高さを加味しなくてはならないので、建物の高さがかなり低くなってしまふことになります。京都市役所の人も、制度を運用し出してから規制される物件の多さにびっくりしているそうです。高い建物が建てられなくなった結果どうなったかということ、地価や建物の値段が上がってしまいましたが、それでも逆に良く売れるようになったというのです。つまり、規制が京都らしさを保証してくれることで、それが価値となってきているというのです。一般的には「規制」=「私権の制限」という意識で、総論では賛成でも、各論では反対という立場の人が結構います。やはり、大きなものを建てられなくなるのは嫌だという考えですね。高度成長期で日本がどんどん大きく成長している時代ならば、建てれば建てられるだけ買われ、その土地の価値は上がっていったかもしれませんが、今はどこでもそうなるとは限らず、都会のどこでも多くの人が集まる時代ではなくなってきています。どのようなものでも建てれば誰かが買ってくれるわけではなく、何かしらの付加価値を付けないと売れなくなってきています。都市計画法の第一種低層住居専用地域というのは、私権の制限というよりは、土地の価値を一定に保つ役割を果たしているとも考えられます。景観規制に対する考え方も、このようにもう少しプラス思考でも良いのではないかと思います。こういう考え方をするときに必要なのは、その土地「らしさ」というものだと思います。例えば、熱海を考えてみましょう。現在の熱海は海の眺望をわれ先に確保しようと建物が建てられてしまつて、景観的に全然良くない。「寛一・お宮」の銅像を作るよりも、その時代を感じさせるような景観や風情を大事にしていれば第一級の温泉保養地になったはずですね。同様の温泉地で成功しているのは、湯布院や銀山温泉などです。歴史的な佇まいを何らかの形で残してきたことで成功している。よく言われる言い方だと、「ナンバーワンからオンリーワンへ」という考え方で、住んで誇りが持てる固有の物語として紡ぎだして、それを全体の中でもう一度再整理をして将来の人たちに分かりやすくする努力をして、次の世代につなげていくことが、その土地にしかできない文化として重要なこととなる。「まちづくり」=「文化づくり」だと考えていくことが重要であると思います。

まちづくりの主役は誰か

そのまちづくりを誰がやるかということで、昨年、“Managing Heritage Cities in Asia and Europe（アジアとヨーロッパにおける歴史的都市マネージング）”というタイトルで、Role of public private partnership（官民パートナーシップの役割）の成功例について話す機会がありましたので、川越の話をしました。

川越の、公でもない、完全な民間でもない「蔵の会²」という組織について紹介をしました。



この蔵の会が市の補助金もほとんど受けずにずっと地道に活動してきて、1999年に重伝建³に選定され、そこから一気に観光客も来るようになりました。これは簡単なことではなく、80年代くらいに一度挫折したこともあります。それも乗り越え、20年かけてやっと重伝建選定にまで至りました。現在は、10月の川越まつりでは人が集まりすぎるくらいになっています。

今日は荻窪の話は一切しませんでした。それは、荻窪のまち、佇まいをどうすべきなのかというところは、皆さん自身が考えることであって、外野の者が何を言っても、実際にやるのはそのまちの人たちだと私は信じているからです。まちづくりの仕組みなどを活用しつつ、そういうことをマネージングしていく公の団体やNPOのような組織などが関わりあいながら気長にやっていっていただきたいと思います。即効性は求めず、地道に「次の世代につなげるんだ！」という大きな気持ちで取り組んでいただきたいというのが、今日の話でございました。

以上です。ありがとうございました。

²蔵の会：蔵造りの町並みで知られる川越の街が、1960年代からその中心である一番街周辺の旧市街地が衰退化の一途を辿り、蔵造りのファサード改変や取壊しが行われ、歴史的な都市として一時は大きな危機を迎えた。1980年代に、商店街活性化による町並み景観保存を謳いながら、一番街の若手の商店主が、建築やまちづくりの専門家、個人的興味で参加した市役所若手職員とともに勉強会を行ったのが蔵の会の始まりである。このような様々な立場の人が集まり、市民主体で進めるまちづくりのスタイルは現在も受け継がれている。2002年には活動範囲を広げるためNPO法人となった。地域に根ざした市民としての自覚を持って、まちづくりをみずから実践するとともに、住民が主体性を持って行うまちづくりの支援を行うことによって、地域社会の発展に寄与することを目的に活動している。（「蔵の会」ホームページより抜粋）

³重伝建：重要伝統的建造物群保存地区の略。下町、宿場町、門前町などの歴史的な集落・町並みの保存を図るため、昭和50年の文化財保護法の改正によって発足した制度。市町村は、伝統的建造物群保存地区を決定し、保存条例に基づき保存計画を定めます。国は市町村からの申出を受けて、我が国にとって価値が高いと判断したものを重要伝統的建造物群保存地区に選定します。市町村の保存・活用の取組みに対し、文化庁や都道府県教育委員会等は指導・助言を行い、また、市町村が行う修理・修景事業等に対して補助し、税制優遇措置を設ける等の支援を行っています。平成25年8月7日現在、重要伝統的建造物群保存地区は、84市町村で104地区（合計面積約3,697ha）あります。（文化庁ホームページより抜粋）

パネルディスカッション

「歴史・文化を感じさせるまち『荻窪』の景観のこれから」

コーディネーター

高見澤 邦郎 氏（首都大学東京名誉教授、荻外荘周辺まちづくり懇談会会長）

パネリスト

山田 幸正 氏

村田 くるみ 氏（NPO 法人すぎなみ学びの楽園）

長瀬 久子 氏（荻窪東町会町会長、荻外荘周辺まちづくり懇談会委員）

大塚 敏之（杉並区都市整備部長）

高見澤 氏 早速ですが、4 人の方々に順次自己紹介をしていただき、後半では意見交換を行っていききたいと思います。

山田先生には非常に良い話をしていただいたのですが、あえて荻外荘については触れずにお話いただいたので、パネルディスカッションの後半あたりでは少し建築の歴史家としてどう見るかということについて少しふれて頂きたいと思います。

荻外荘を今後どうするかという点については大塚部長にお聞きすることにはなりますが、とりあえず土地を購入することが決まったという段階で、まだ今後具体的にどうするという所までは話は行っていませんよね。ですので、荻外荘周辺、特に荻窪南地域のまちづくりのあるべき方向性について、山田先生からいくつかのストーリー立てとか、なじむ「らしい」雰囲気的大事だとか、いくつかのポイントが出されましたので、それらもを意識しながら今後のまちづくりを語っていただけたらと思います。

荻外荘の資料をお配りしておりますので、最初に内容の確認をいたします。昭和 2 年に入澤達吉という、明治・大正・昭和に大活躍された医学者の方の、郊外の豪壮な住宅として建てられたものです。設計者が伊藤忠太という、築地本願寺の設計者として有名な建築家です。日本の近代建築を、ヨーロッパの真似ではなく、東洋の雰囲気の設計をされた先達の方です。昭和 12 年に、近衛文麿氏がどうしてもここを欲しいということで入澤達吉氏から買い取ったと聞いております。そして、戦後、昭和 35 年に玄関部分を中心とした、建物の 3 分の 1 強が巣鴨の天理教に譲渡されて、駒込にある天理教の東京総本部に移築されました。これは、当時の中山御柱が近衛氏と付き合いがあったという歴史的背景があります。その部分が奇跡的に良い状態で今日も残っています。もしこの 2 つが荻窪の地で合体すればさらに価値が高まるだろうと思われれます。

そのため土地を買ったが今後どうしようかということで、今日ご出演の長瀬町会長も含めて、区の主催で今年の夏ごろから月 1 回程度懇談会が開催されております。来年の春に何かの方向性を簡単にまとめて、来年度以降も何らかのかたちで議論が続けられ、だんだんと方向性が煮詰まっていて、数年先にはここが良い形で公開されれば、というのが懇談会に参加する者の願いです。私は町田市在住なのですが、なぜこの仕事をお手伝いしているかというと、高等学校に行くまで荻外荘から 2 分のところに住んでいた経緯もありまして、昔のことも多少頭に残っているだろうということでしょうか、この懇談会のメンバーとして呼ばれた次第です。

では、どなたから自己紹介していただけますでしょうか。山田先生はさきほどお話し
ていただいたばかりですので、角川庭園の運営委託を開園以来受託している立場に
いらっしゃる村田さんからまずお話しください。

村 田 氏

こんにちは。本日のシンポジウムの主役とも言える荻外荘から歩いて3分くらい
のところにある「角川庭園・幻戯山房～すぎなみ詩歌館」の管理運営を受託してい
る NPO 法人から来ました村田と申します。角川書店の創設者で国文学者・俳人
であった角川源義氏の旧邸と庭が寄贈されたものが角川庭園です。平成21年に、俳
句や短歌を学ぶ場として開園しました。建物は近代数寄屋造りの名建築です。杉並
区には貴重な近代建築が多く残されていますが、旧角川邸もこのうちのひとつとして、
国の登録有形文化財に指定されており、荻窪南地区の景観の見所のひとつとなっ
ています。

ここで少し、管理運営の受託者であるすぎなみ学びの楽園についてごく簡単にご
紹介させていただきます。学びの楽園は、杉並地域大学の第一期修了生が2007年
に設立しました。「住んでよし、学んでよし、心のふるさと杉並を創ろう」という言
葉をモットーにしまして、約40名のメンバーで地域活動を行ってきています。こ
のような私どもが角川庭園の管理運営を受託させていただいておりますが、施設運
営の経験ということから言いますと、全くの素人の集団でしたので、試行錯誤を繰
り返しながら、所管課の皆様に変御苦労をおかけしながら今年5年目を迎えてお
ります。

そのような私たちが角川庭園を運営するに当たりいくつか心がけている点があり
ます。まず、角川庭園は杉並の貴重な文化財でありますので、庭園も建物も始めの
形を変えないということに細心の注意を払っています。たとえば、庭園の植物ひと
つ何も足さない、何も引かないということルールにしております。来園者の方々
の中には、お庭に良い植物があるから、と、株分けして持ってきてくださる方もい
らっしゃるのですが、丁重にお断りさせていただいております。

角川源義記念館としての役割も当然あります。源義さんの所蔵品、著書などの保
管・展示をしないわけにはいきませんが、まだまだ不十分なところがあるかと思いま
す。我々の中に学芸員が一人もいないため、メンバーで少しずつ勉強を重ねているこ
ろですが、これからも努力していきたいと思っております。

源義記念館として、ほかの地域の文学館等との連携も必要と考えております。源
義さんの故郷である富山県に、高志の国(こしのくに)文学館という施設が去年オ
ープンしました。角川源義氏の長女である辺見じゅんさんが館長になれる予定だ
ったのですが、その直前にお亡くなりになりました。そちらには、源義さんの非
常に貴重な所蔵品がたくさん展示されています。そちらとの連携もこれからしてい
きたいと考えております。

それから、貸室事業についてですが、区民の皆様の心地よい居場所を提供したい
という思いで、区民講座の運営では、大人の学びを存分に楽しんでいただきたいと
いうことを考えて取り組んでいます。

年3回イベントも開催しております。杉並区民の皆様の交流の拠点の一つになれ
ばと考えながらいつも企画をしております。

ということで、本日のシンポジウムのテーマであります荻窪の景観についてひと

こと申し上げます。

荻窪南地域は、大田黒には昭和の時代の音楽の文化、角川では文学、荻外荘では歴史の文化が残っているわけですが、それをまちの皆様が見守って育てて来られたのだと思います。今回、大田黒、角川に荻外荘が加わったことで、点から面の広がり生まれたのだと思います。3つの施設の連携ができるならば、相乗効果が期待でき、まちの価値が上がっていくのではないかと思います。その意味でも、角川庭園が荻窪の景観づくりにどのように貢献できるかを今日のシンポジウムで学ばせて頂きたいと思っております。どうぞよろしく願いいたします。

高見澤 氏 ありがとうございます。最後に触れられました、いろいろな良い場所をどのように連携させていくかというのは、今日の主題でもありますので、後でその議論をしたいと思っております。では次に、地元としてこの地域をどう見ているかといったあたりを、長瀬さんの方からお願いします。

長瀬 氏 荻窪東町会の会長をさせていただいております、長瀬と申します。今回地域に住んでいる者の代表として参加させていただきました。ご存知のように、荻窪駅南口を左の方に行きますと、バス通りがありまして、そこを渡ったところからが東町会の地区になります。

まず、アメックスビルの敷地内にある桜の木の下に、明治天皇の御休憩場所というのがあり、長屋門も現存しております。そこから少し東に行くと西郊ロッチングがあります。もっと進んでいきますと、荻窪体育館にはオーロラの碑というのがあります。これは、原水爆禁止運動発祥の地として、地域の方々がビキニ環礁の時に今後の原水爆による被害をなくそうということで始められたと聞いております。また、この地域一帯は、ガンジーの像、読書の森公園などみどり豊かな環境が残っております。それから、大田黒公園がありまして、ここはご存知の通り音楽評論家・大田黒元雄氏の住居跡である記念館と、立派な日本庭園が残っております。荻外荘の方は、今までは近衛様が住まわれていましたので、私たちは立ち入った事はなく、外観もどのようなものだろうかと思いながら前を通っておりました。今回区が取得されたということで、私たちも中の方はどうだろうかということで、興味をもっておりました。今日も樹木について考えておりましたら、やはりアカマツを中心としてクロマツ、クスなど大きな木など50本以上ありまして、これを多く残したらみどりの多い風格のあるまちが残せると思っております。また、この地域では昔から著名な文化人、芸術家、歴史的人物を多く輩出しております。現在も良い環境を残そうという人たちが多く住まわれていますので、新しい建物も建てられてはいるのですが、区の条例などで乱開発が行われないように守られておりますので、今のところ比較的落ち着いたみどり豊かな街並みとして残っております。今後も町会の方で防犯・安心援助隊パトロール隊のパトロール等で定期的に地域全体を見守って行きたいと思っております。今後も荻外荘を中心として広い場所がありますので、荻外荘は重要文化財であるとともに、またこの地から文化・芸術、それから平和に関する心の面、有形・無形の文化を発信できる場所に成長していければ良いのではないかと思います。地域としても、それに共存できるような形で、新しい観光というのでしょうか、日々のたたずまいの中から荻窪らしさを感じとって頂く場所を目指していければと考えております。あまりまとまりませんでした。よろしく

お願いいたします。

高見澤 氏

ありがとうございました。荻窪東町会の会長としての御苦勞もおありになるかと思っておりますので、後でそのあたりも伺いたいと思っております。担当の大塚部長からは荻外荘のことというよりは、この一帯の今後のまちづくりについて伺いたいと思っております。

大塚部長

こんにちは。杉並区都市整備部長の大塚です。私は個人的には役所に入って 35 年で、今年で退職の年を迎えます。私は建築職として、建築行政にずっと携わっておりました。建築行政というのは、たとえば、建物を建てる時にその建物が建築基準法上適切かどうかを判断して確認申請を下ろしていく建築確認申請の業務や、学校・図書館・保育園・児童館、大きいものでは座・高円寺など、公の建物の建築や維持管理に携わりました。あと、もう一つの分野にまちづくりもあります。ひととことで「まちづくり」といってもいろいろありますが、最初は例えば高円寺の「蚕糸・気象研究所跡地のまちづくり」の延長の「防災まちづくり」とか、「景観まちづくり」などにも携わりました。

景観まちづくりについて申しますと、この辺りでは昭和 56 年に大田黒元雄さんが私邸を区に寄付されて大田黒公園を整備した後、平成 4 年頃に周辺の住民の有志の方々が「大田黒公園周辺景観を考える会」を立ち上げて、勉強を重ねられた結果平成 6 年頃に大田黒公園周辺地区のまちづくり構想を区に提出されました。区はこれを受けてまちづくり計画を立てました。そのうちの一つである地区計画では、大田黒公園周辺のまちの美しい景観を守っていくことを中心にすることになりました。美しい景観を守っていくためには、やはり敷地面積の細分化を防ぐことが大事だということで、敷地面積の最低限度をこの地区計画で決めました。当時では画期的だったと思いますが、最低敷地面積が 100 m²、中心地域では 150 m²となっております。先ほど山田先生が言われていたような「規制」をかけ、あまり小さな建物は建たず、ある程度の敷地が確保されています。このように、荻窪は住まわれている方が景観を保存してきた地域となっています。昔からの景観が残されているし、歩いていても非常に簡素できれいなまちなみが残っていることを確認できると思います。

その後、景観法ができて杉並区でも平成 20 年に景観条例を定めました。それから、翌年に景観行政団体になり、杉並区全域を景観計画区域にし、景観形成重点地区も決めました。特に大規模な建物を建てられる際には事前に区に協議をさせていただき、建築計画の内容を専門家からなる審議会にかけて杉並区の景観計画にあっているかどうかというところを審査してから実際に建築をしていただくという流れになっています。そうやって、杉並区内全体の景観の誘導を行っているところです。

荻窪近辺についてお話をさせていただきますと、現在は荻窪周辺のまちづくりについて考える「荻窪まちづくり会議」というのを立ち上げました。荻窪と言いましても、駅周辺、青梅街道を挟んで南北など、それぞれの特徴がありますので、それを生かしたまちづくりの計画をしていくことになると思います。今回、その一角に大田黒、角川、そして荻外荘がトライアングルのように整備され、その他にも与謝野公園、西郊ロッキング、読書の森公園など非常に優れた景観資源がありますので、そういったものを生かして荻窪の価値をさらに高めていきたいと考えております。行政だけではもちろんこれはできませんので、行政はバックアップという立場で、

区民の皆様と一緒に進めていければと考えております。

高見澤 氏 ありがとうございます。最後に触れられました「荻窪まちづくり会議」など、山田先生が話されていたような、区民と行政のパートナーシップというのは、今日の大事な話題の一つでもあります。村田さんの組織や長瀬さんの荻窪東町会も区民活動の一環でありますので、そういった話題にも触れていただければと思います。

では、議論の口火を切るにあたり、山田先生に荻外荘について少しお話を伺いたいのですが。基調講演で「そのまちらしさ」や「たたずまい」で物語を作り、それを気長に次の世代の人へ引き継ぐような態度が必要だ、という話をされていましたが、荻外荘の懇談会で地域を歩いてみて、この地域でどうしていけば良いか、というところでもう一つヒントのようなものはいただけますか。

山田 氏 難しいお題ですね。杉並区が巨費を投じて荻外荘を買い取る決断をし、区民の方がそれを支持したというのは非常に重要なことだと思っております。公費をそういうものに使うというのは、いろいろな意見があったのではと思うのですが、そこを英断されたのは非常に評価されることだと思えます。

次に、区の景観施策をホームページから見させていただいたのですが、こういった景観のシンポジウムを平成18年から行われているようで、さらに、景観の賞の授与もやられていて、区民の皆さんに景観ということを意識づけて、住民の方も積極的に参加されているというところも将来的な希望がもてるというか、そういうものもまちづくりに生かしていける、区民の方も真面目に受け止められているというのに希望を持てます。

私は学生の頃からいろいろな町並み保存の活動に触れてきました。一つの建物を保存するために、建築学会から保存要望書を何度も出してきたりしましたが、やっても保存されず、残せなかったことが多く、空虚な感じがしていました。ですが、最近の杉並の一連の動きを見ると、外野の人間としては非常に心強いです。それはおそらく、地域の方々の文化力の問題もあるとは思いますが、私が今まで活動してきた中では、なかなか保存に対する手応えが感じられない案件が多くありましたが、杉並については今後が非常に楽しみであります。

荻外荘自体の建築的価値は、昭和の建物でこれだけの邸宅は東京の中でもそうあるものではありません。ましてやそれを設計したのは伊東忠太です。伊東忠太という人物は、「造家」から「建築」に変えた人であり、建築学会の祖であります。彼は、当時西洋建築ばかりが注目されていた中、東洋建築に目を向けており、日本の建築の学問を確立しないといけないという斬新な考えを最初に提唱された方で、東洋建築史の礎を築いた人でもあります。平安神宮や築地本願寺などの宗教建築を主に手掛けており、住宅建築はそれほど多くは手掛けていなかったようですので、荻外荘は彼の手がけた住宅建築としてはこれが唯一現存しているものといえるかもしれません。そういう意味でも文化財的価値が非常に高いと言えます。

この荻外荘の肝心な部分が巣鴨の天理教に移築されているのですが、実際に見てみるととても丁寧に移築作業が行われていることが分かります。そして、天理教の方も文化財的価値が分かっていたのか、非常に大切に使用していただいている、建具もきれいに残っています。建具が当時のまま残されているのは、住宅建築では非常

に稀有なことです。戦後の状況を考えると、移築されていなかったらもう残っていなかったかもしれませんし、天理教で大事に移築部分を使っていてくれたことは非常に運が良かったと言えるし、管理してきた方々の努力は称賛に値することです。

荻外荘に関してはいろいろな人物が関わっています。伊東忠太、入澤達吉、そして近衛文麿です。近衛文麿に関しては、昭和史における様々な解釈があり、多くの議論がされており、いろいろな考えが交錯するところでもあります。戦前・戦中・戦後の日本のことを、この建物において、真面目に考えるということは非常に意味深く、重要ではないかと思います。明治、大正、昭和初期と日本が戦争の道をたどった時代のものが残っている、それが荻外荘であると思います。そういった歴史、無形のものを含めて非常に重要であると言えます。そのことを多くの人にご理解いただいて、うまく保存・活用していただくというのが第一だと思います。

先ほど来私がお話したことですが、「文化財の建物を残すという動きにはかなりの歴史がありますが、それを点で保存するのではなく、面で保存していくのが大事だ」ということについて。川越は「蔵造りの町並み保存」ということでまちづくりを進めていますが、「町並み」という言葉があるように、連続していないと格好が悪い。しかし、川越も最初は歯抜けのように古い町家が点で残されていました。今はかなり修景されてきれいになっています。

「景観保存」という観点から言うと、たとえ点で残っていてもいいのです、しかたないのです。大事なことは、景観をつなぐイメージを持って来てつなぐことです。そのように見せ方をうまく工夫することが、これからのまちづくりで非常に重要なことだと思います。これはなかなか難しい話だと思いますが、そのまちを語る分かりやすいストーリーを皆さんに語り継いで頂き、ここにこういうものがある、ここはこういう場所だと皆が分かるようにしていくことが良いです。しかし、そのストーリーも作り物であったり、嘘だったりではだめで、実際に歴史的なものとして残っているものでないといけません。古い建物は、一度なくなってしまえばもう二度と造ることはできません。古いものがあるなら徹底的に残していって欲しいのです。そして、これは昭和初期のもの、大正時代のもの、といつのものであるかをはっきりさせてつないでいきます。新しいものを加える場合でも、このストーリーをつなぐために良いものを作りましたということが大事です。点を線に、線を面につないでいき、そこにソフトウェアとしての歴史的な観念をバックグラウンドに据えて、まちを考え、創っていくことができないか、と思います。点や線から、歴史という観点から面的に広げることができるかどうかということです。京都などは、特別な手法を取らなくてもわかりやすいですが、普通のまちではそのままでは分かりにくいからこそ、そういったストーリーを使った手法が必要なのだと、私は考えています。

高見澤 氏 ありがとうございます。

地域全体として見たときに、区にやって欲しいというスタンスではなく、「こうあるといいね」というような話題につなげて行くべしということですね。また、町会としてどう受け止め、誰がやっていくのか、という話にもなっていくと思います。

今、山田先生が荻外荘の建築的価値についてはすべて話して下さいました。山田先生は建築史の専門家いらっしゃいますので、99%間違いのない話だと思います。

懇談会の中では、深くは議論する時間がありませんでしたが、萩外荘となると、近衛さんとの関係から、歴史的意味合いというものを考えなくてはいけない。今日も直接はその議論をしません、本日杉並郷土史会の方が見えているので、後ほど一言いただきましょうか。

では、村田さん、地域全体を考えて、もうちょっとこういうものがあると角川庭園も頑張れる、というような話があればお願いします。

村田 氏 はい。角川庭園の開園当初は、角川庭園までの道のりが分かりにくく、徒歩 15 分とは案内していますが、詩歌館は、詩歌・俳句が中心の建物なので、比較的年齢の高い方、特に女性の利用が多いので、20 分くらいかかると仰っていました。ですので、なるべくアクセスしやすいようにしていただければ、というのが利用者からも声が出ています。

もうひとつは、山田先生が先ほど仰っていた、そのまち「らしさ」と、イメージを伝える分かりやすいストーリーという事についてですが、それをどんな方法でやっていくのか、ということですね。民間の NPO など、そういった試みを行っている団体は沢山います。例えば、萩窪の魅力を紹介するというコンセプトのもと、「萩窪の魅力シリーズ」という、萩窪を PR するためのグッズを作り始めているグループがあります。作っているのは、「萩窪かるた」、「萩窪絵葉書」、「萩窪双六」などです。萩窪の北の方にはかつて、太宰治や井伏鱒二などが住んでいましたよね、そこで、「萩窪双六」では、太宰さんの住居跡に行くと、ちょっと井伏さんのお宅にも寄り道して 2 回休みとか、衛生病院に行くと入院してしまって 4 回休みとか、楽しみながら萩窪覚えられるようになっていきます。ほかに、大田黒元雄さん、角川源義さん、近衛文麿さんの足跡を辿っていく DVD も作られています。これらは、行政とは全く関係なく、民間のグループが作ったものです。萩窪の古い写真を集めてデータベース化し、それを元にした講演会を行うなど、様々な活動が活発に行われていますので、民間の力を行政の方で是非活用していただければと思います。そういうところで、山田先生が仰っていた「分かりやすいストーリー」というものが区民の方たちに伝わっていくのではないかと思います。

高見澤 氏 ありがとうございます。

そういった沢山の組織を、行政もすべて把握している訳ではないと思いますが、そういった民間で活動されている組織の横のつながりを生かして、今日のシンポジウムのテーマに則して来年、再来年と継続的に発展させる可能性が大いにあるということですね。

やっぱり、頼まれてやっているのではなく、自らの意思で面白いことをやろうという方々がいる、それがあつた種の文化でしょうね。

さて、それでは長瀬さん、町会には、今度萩外荘が公開されることについて周辺の方からの声が届いていたりしますか。あるいは、まだあまり関心が起こっていないとか。その辺今日の議題に関して地元の町会としてはどうでしょうか。

長瀬 氏 萩外荘の公開と公園化については、皆さんとても期待しております、楽しめる場所になると良いとか、歴史が分かるような場所になるのかな、といった話をされています。

町会としては、安心・安全というのが何よりも一番大事だと考えております。防

災とか、防犯、火災などが起きないように日頃から町会だけでなく興味のある方にもお声かけをして定期的なパトロールに参加していただければもう少し地域の意識も高まるのではと思っております。今後も荻外荘を中心として、皆さんに文化・芸術などが広まるようになっていけば良いと考えております。

高見澤 氏 文化のスタートには安全・安心というのが最小限の住民のニーズということですね。懇談会では、色々な施設や遊び場とか、お茶を飲む場所もなくて、何かそういうものがあると良いというお話をされていましたがどうでしょうか。

長瀬 氏 はい。大田黒公園だとか、歩く所・見る所は沢山あるのですが、ちょっと休んでお茶を飲むとか、休憩するスペースやお手洗いなどを整備していただけるとありがたい、という希望はよく聞きます。年配の方も地域に沢山いらっしゃいますので、そういった方々が日頃楽しんだりとか和んだりとかできる場所ができれば良いです。そこには、ベンチやちょっとした休憩場所、お手洗いがあれば、また次の場所へ足も運びやすいのではないかと思います。

それから、またちょっと違う話になりますが、この地域は交通の便が悪く、駅から遠くに行く方向のバスはあるのですが、駅の方に戻るバスがありません。荻外荘の辺りは道が狭いので大きなバスは通れませんが、小さいミニバスなどが周辺を回ってくれば色々な所にいけるのではないかなと思います。そうすれば、お年寄りだけでなく、お子さん連れの方でも楽しめますし、普段の買い物などでも非常に助かります。

高見澤 氏 ありがとうございます。

大塚部長に伺いたいののですが、私が以前頂いた「すぎなみ景観ある区マップ」、沢山の地域の見どころが載っていますが、利用者からするとなかなか道が分からないとか、地元の人にとっては他所の人が家の前をやたら通るとか、色々問題もあると思うのですが、その辺のまち全体を訪れる人、地元の人のために、なかなかこの地図を見てもパッと頭には入ってきませんが、区としては荻外荘に結びつかなくても年々何かやっていらっしゃるということですかね。

大塚部長 区には、ある区マップのほか、史跡の散策マップとか、バリアフリーマップとか沢山マップがあります。実は、そのある区マップは、村田さんの所の学びの学園に委託して作っているものです。やはり、役人が作ると、役人っぽくて面白くないんですよ。防災など、ハードの部分を作る事に関しては知識や経験はありますが、ソフトの部分の話になると、なかなかうまくいかない。ですので、例えば、杉並公会堂の運営などは PFI 事業と言いまして、区ではやっていないです。あとは、座・高円寺も NPO が運営しています。角川庭園は NPO に運営を委託してしまして、詩歌館かるたなど、良い企画を沢山やっていただいています。役人が直営でやっているとなかなかそういった発想のものが出にくいので、そういった民間の豊かで面白い発想を出していただき、区はそれを支援していくという立場でやっていくのが、公と民間、地域の方の役割分担だと思います。

それから、荻外荘の話になりますと、これから公園としてどう作っていくかを考えていくにあたり、懇談会から色々な意見を聴いている所です。これだけ良い資源というのはなかなかないものですから、ただ建物を整備して普通の公園としてやっていくというのではもったいない。荻窪の観光スポットと言いますか、新しい目玉

になるようにして、それを含めた荻窪地域の活性化を図っていくことを考えています。そのひとつとして、散策マップや、案内板の設置についても考えていく予定です。実は、すでに案内板がある場所もあるのですが、施設単体で最短距離のルートに案内板を設置しているため、そのルートに入らないとなかなか辿りつけなかったりします。ですので、荻外荘はメインの通りに面しているのです、そこを中心に案内板を展開していくのが分かりやすいのではと思います。今後、こういったマップや案内板も民間や地域の力をお借りしながら作っていきたいと考えております。今後、荻窪のまちづくりができる NPO ができると良いかな、と個人的には考えております。

高見澤 氏 これから期待するところですね。

ポストトレイルというのは、レンガが敷いてある道を歩いて行くと目ぼしい観光スポットを巡れるというものでしたね。そういった良いものというのはお金がかかる話ですし、地元としても自分の家の前を急にレンガ敷きにされて色んな人が歩くようにも困ってしまう話ですよ。色々な考えの方がいらっしゃるので慎重に皆で議論する必要もあるでしょう。官民パートナーという話が山田先生の講演でありましたが、日本の場合、最初は思いのある地域の人や役人が一緒になって頑張るのですが、3年、4年経つと形骸化されてしまい、いくらで委託に出すか、などの話になってきてしまう。

先ほど山田先生が話されていた川越の事例はうまくいった例だと思いますが、あれは何かコツとありますか、ポイントがあったのでしょうか。

山田 氏 川越で言えば、70年代くらい、私が学生の時に調査を行った頃は、市は市の指定文化財として蔵造り、土蔵造りの町屋を十数件指定していました。重要文化財の大沢家だけではなく、明治30年代に蔵造りのまちなみを調査して文化財にしましょうという考えがありました。その前から東京に近いこともあって、東大の先生はじめ多くの研究者が調査をしていました。調査はそれなりに進みましたが、調査だけをされたお店の人からすると、何もしてもらえず、何ごとですかということになってしまって、保存というものに対して非常に反発を受けた時期がありました。

それが80年代になると、町並みのある一番街周辺は商業地域で700%くらいの容積率がありましたので、大きいマンションが建つようになりました。町並みの近くに高層マンション建設問題が起こり、それを食い止めようとしたのですが、止められませんでした。

今、川越のまちを良く見ると、古い町家の間や背後に大きい建物あります。町並みから少し離れた所ですが、明治時代にできた、織物を取引する市場が長屋の建築として遺っていました。そこは新築マンションの敷地の一部になるところでしたが、川越市は急遽、それを調査して、結局購入しました。現在も残されています。時々イベント等を行っているだけで、そのすぐ横には10階建てのマンションが建っています。その新旧ふたつの建物の対比から、盛んにマンションが建てられていたことが良く分かります。

市としては、文化財の保存というものを熱心に行っていた部分もありますが、まちのお店側に立って考えてくれたかと言えばそうではないということがありました。そして建築史などの研究者も、私もそうかしれませんが、調査だけをして

自分の研究として、何も調査先にお返ししない状態が当たり前のように行われていた時代がありました。前野先生はそれを「調査泥棒」といっています。前野先生は講演のときにはいつも言うのですが、保存は大嫌いと思っている人には、「調査」と言っただけでは駄目で、良い所を見せてもらいに来ましたと言わないといけない。こういう所が良い所ですよと建物の持ち主などに言ってあげることが大事だと言っています。我々は自分の研究や調査のためだけに調査をして、どこかでそれを発表しますが、調べられた人は内容を良く知らないままになっていて、何かしてくれるのかなと思いきや何もしてくれない。持ち主が代替わりした時に相続税が大変で、壊されてしまうのが多くの文化財です。川越もそのような状況で、我々が調査したころの店主や所有者の方々は保存をすごくネガティブにとらえて、私権の侵害になることはしたくない、そんなものを自分の子孫に伝えたくない、文化財指定されてしまうと本来ならばそこに何階建てものマンションが建てられるのに、それが建てられなくなってしまう、そんなものを子どもに伝えられない、とおっしゃいます。でもそう言っている人も古い建物を残したいとは思っているのです。細々と残っていたものが、どうしても経済原理には勝てないで姿を消していくのを目の前で何度も見てきました。そのような中、蔵の会というのは、80年代くらいに若手の店主が中心になって地元の建築家、地元の設計コンサル、我々のような研究者を集めて始まりました。その中に私の後輩で、川越で生まれ、川越高校を出て、私と同じ研究室で学んだ後、川越市役所の職員となった人物で、この会の主要なメンバーがいます。彼は、川越の町並み保存について生き字引のような人です。当初、蔵の会と川越市との関係は決して良好というわけではありませんでした。そのような状況が90年代くらいまで続きました。その蔵の会がはじめたことの一つとして、景観賞という賞があります。鉄筋コンクリートで蔵っぽいものを造ることは、我々も批判したこともあったのですが、それでも蔵造りの意匠を生かそうと言う動きは褒めてあげようということになりました。そのころから商店主や都市計画の先生も含めて、みんな話し合いをしていくまちづくり委員会というものが作られていきました。蔵の会で活躍している建築家も、都市計画や歴史の研究者も加わって、市がコーディネートするようになっていきました。そこで作られたのが「まちづくり規範」でした。何々をしてはいけないという規制をかける言葉がほとんど入らないような文言で、わかりやすく、こうしていきましょうという規約でした。それが90年代くらいから、商店会を中心に広く理解され、受け入れられていきました。しかしまだ問題はあって、町並みの通り沿いの商店の人達はOKなのですが、普通の人達、つまり川越もベッドタウン化していたので、多くの人は東京に通うサラリーマンであり、町並みなんて関係ないよという人達が多かったため、そんな規制がかかるのは嫌だという感じがありました。再びマンション問題が表面に出た時、川越の町並みを残すのは自分たちにとって大事なことであると、町並みの周辺の町会も加わった十ヶ町会というものができ、そこで合意が取れたことで1999年の重伝建の選定を受けることができました。マンション問題が80年代や90年代に起こった時に、どのように対応していったかということ、結果的には上手くいかなかったのですが、その事をまた反省して粘り強く乗り越えていったことで、重伝建につながっていきました。今、重伝建となったことから他の市町村から人が数多くくるようになりました。

が、なかには偽物（フェイク）を造っているところもあるので、それが進むとどうなっていくかなという点も気になります。川越も東京電力が電線の地中化をして一気に変わりました。電線がなくなったことでかなり景観が変わりました。毎年10月15日、16日にお祭りがあり山車が通るのですが、お祭りの風景が映えるようになりました。NHKの連ドラの舞台にもなりました。

しかし市役所と民間、蔵の会というのが上手く協調し合って今までずっと順調にやってきたかという点と絶対そんなことはなく、ごく最近の話だけのことで、昔は非常に冷たい関係でした。同じようなことでうまくいかなくなってしまったことも、他のまちではあるのかもしれませんが、やっぱり最終的には人なのかなと思いました。先ほどお話しした川越市役所の方のように、ずっとやり続けている、そういう人間が一人でもいて、うまくいかなくなるようなことがあっても、それを乗り越えて行って次に繋げてきたから今があるのです。やはり人づくりが大切なのだろうなと思っています。

高見澤 氏 ありがとうございます。中々一直線にトントンと話が行ったわけではなくて、色々なお互いの理論があったのですね。

さて、2、3会場からのご質疑があればと思います。郷土史会の新村会長がみえていますので、近衛さんの時代、そして荻外荘の保存などについてコメントがあったらお願いします。

新村 氏 突然のご指名でございますけれども、杉並郷土史会会長の新村でございます。郷土史会は今年創立40周年になりました。杉並の歴史を研究するというのをテーマに活動しております。今回荻外荘を区が買ったということで、郷土史会も大変歓迎しております。先程山田先生もお話ししました通り、荻外荘は近衛さんの屋敷でございます。近衛さんは戦前に3回にわたって組閣をしております。ですから、本当に日本の政治の舞台だったわけですね。歴史的には2回荻窪会談という表だった会談がされております。その2回とも出席しておりますのが、陸軍大臣の東条英機でございます。近衛首相と東条陸曹があそこでどういう意見をしたか、そういうことを研究するだけでも日本の戦前の歴史、そういったものを理解する上で大変重要なことだと思えます。ただいま、歴史認識に関しまして、中国や韓国との間で色々問題になっておりますけれども、私どもの世代は学校教育で第2次世界大戦の正式な教育というのは受けていないんですね。ですから、歴史に根暗があるものは将来に対する洞察が出来ないということで、この辺で本当にしっかりと第2次世界大戦の原因といったものを研究するそんな時期にかかっております。それをあの場所で研究、静かに考えてもらいたいという施設にしてもらいたいと、郷土史会では非常に切望しているしいたございます。たくさんのことをしゃべりたいのですが歴史的な認識、そういったものに関しましてはこのくらいにしておきたいと思えます。

高見澤 氏 ありがとうございます。歴史観は色々あるにせよ、その場所がさまざまな思考の糸口になるような場所となるといいですね。ほかに会場の方からどなたかご意見、ご質問があればお願いいたします。

来場者 今お話がありましたが、歴史的な事というのはソフトに属することで、まちなみとか家はハードと結びつく意味があると思っているのですが、そういう意味で例えば渡辺大将のお宅なんかは結局壊れてしまいましたけど、近衛さんの家を残すので

あれば何故渡辺大将の家と一緒にしなかったのか。これは日本が戦後、戦前からずっと戦争になった基になったことなのに、何故行わなかったのかと残念に思う。他にもそういう場所があるかも知れませんが、是非そういうことを考えながらやって頂きたいと思います。以上です。

高見澤 氏 ありがとうございます。荻外荘単独でなく、区へは社会教育とか博物館等の組織との協力も求められると思います。博物館の運営委員長の原さんがみえていますので、原先生一言お願いします。

原 氏 原でございます。歴史の問題が出てきましたけれども、今の日本の現状をみても歴史認識の問題をしっかりと考えなくてはいけない時だろうと思います。従いまして、この近衛さんのお宅があるということは、みなさんがおっしゃったようにここで、もっといえば明治維新から戦後に至るまでの歴史というものを振り返る場所として大事にしていきたいと、みなさんで一緒に考えて行けば良いと思っております。荻外荘の懇談会にも私は参加させて頂いておりますので、これからどのような結論になるか分かりませんが、今申し上げましたような歴史を考える大事な場所だということに基づき、この場所が利用されていくように、そういう面もあっていだろうと思っております。

高見澤 氏 ありがとうございます。いつも急をお願いして申し訳ないです。もう一方か二方お願いします。

来場者 今日、午前中に角川庭園で俳句がありまして、12時50分までということで走ってきまして荻外荘をみせてもらいました。これから荻外荘がどうなるかということですが、私は和泉町ですから大原交差点、杉並の一番外れで、ここまでくるのは大変遠いのですが、例えば荻外荘といってもこの辺の人は分かるでしょうけれども、和泉、方南の人に荻外荘といっても全く分かりません。あと、読めません。ですからこれからは、荻外荘は何にしても必ず仮名を付けて欲しいと思います。それから大事なことは、これから荻外荘がどうなるかという、いつから公開になるかということもあります。私は73歳まで仕事していて何もすることがなくてたまたま角川庭園で、区役所のご声援があると思うのですが、広報で応募して今俳句を始めでなんとか頑張っているところですが、そういう風に一般の区民の方が具体的に使えるような中身をものにして頂ければ大変うれしいと思います。もう一つ何回もみなさんおっしゃっておりますけれども、足がないです。私は角川庭園に行くのに3回迷いましたけれども、やっぱり地図がない、看板がない。誰でも分かるようなマップが欲しいと言うのがあります。色々言いたいことはありますが、やっぱり荻外荘が出来て、我々和泉、方南までに恩恵があるような場所にして欲しいと、大塚部長にお願い申し上げます。よろしく願いいたします。

高見澤 氏 ありがとうございます。応援のメールとともに宿題も頂きました。そろそろ時間が来ていますが、山田さんの方からもう一言お願いいたします。

山田 氏 余計なことも含めて色々言ってきましたが、もう一つしゃべりたいことがあります。杉並区が主導して荻外荘を公費で、巨費を投じて買うという英断をされたということ、それを受け入れた区民の方々がいることはすばらしいことだと、さきほど申し上げました。しかし、これはその先を考えなければ意味がありません。この先いつまでも区が主導しているんなことをやっていつまで長続きするのでしょうか。そ

うしては持続可能な活用にはならないであろうと思っています。公が買って、住民の方が使える施設は日本中数多くありますが、それらが上手くいっている例はほとんどない、あまり多くは聞かない。それは結局補助金頼りで、工夫もなければ、住民や使う人のことをあまり考えないからだと思います。荻外荘を今後なんらかの形で活用していくという枠組みを作っていく時に、段々と公の力が少しずつ後ろに引いていくような形で、結局、住民が中心となって運営・管理する。周りとの連携を含めて、はじめ公が主導したことを住民に受取って頂いて、さらにそれが住民の中で上手く使いこなせていく。そのようなプロセスが次の文化を創っていく。そのようなことが10年後や20年後に出来ることが一番重要だと思います。それが出来れば多分、一種の「杉並モデル」として、周りからとりあげられ、きちっと研究してくれると思います。PPP、パブリック・プライベート・パーソナルシップ(官民協働)というものの良い実例として、この荻外荘を中心とした杉並区荻窪の取り組みを、例えば、ヨーロッパに行って、「日本ではこんなすばらしい実例があります」と話せるようになっていくことが重要であろうと思います。区民だけでなく、杉並区に通ってくる学生や勤めている人も含め、区のいろんな人達が共有できるようになれば、世界に誇れるものをめざして、そういう高い目標を持ってやるべきことだろうと思います。地元や区が何かやっているからというレベルではなく、区民の多くが意味あることとしてやっているんだという自覚の上で取り組んで頂ければと思います。そのことを、私は杉並区民ではないですが、お願いしたいと思っております。

高見澤 氏 ありがとうございます。世界に通用する杉並モデル、荻窪モデルを作れと強いコメント、メッセージを頂きました。では村田さん。

村田 氏 荻窪のまちづくりというのは、荻窪に住んでいる方たちが、荻窪に住んでいる方たちのために考えて進めていくことだと申すまでもないことだと思いますが、オリンピックの東京開催も決まりましたので、これからは日本の遠くの地域の方たちが東京にいらっしやったり、海外から東京に来られる方も増えて行くと思われそうですので、その際に荻窪ってどんな所と言われたらなんと答えるのか。荻窪駅にふらっと来られた方が荻窪のまちを歩いてみたいなと思った時に、どんな風に歩けばいいのかというような外からみた荻窪というのを意識していくことも大事だと思います。荻窪は、決して観光都市ではありません。住宅地ですので、闇雲に掲示板を作られたり、多くの方がぞろぞろ歩いたりしてもご迷惑になると思いますが、一旦外からも視点を持つてみるというのも良いのかなと思います。

高見澤 氏 ありがとうございます。なるほど、その通りですね。長瀬さん、お願いします。

長瀬 氏 地域としましては、昔から平和とか文化を愛する方々が住んでいた場所でありますので、今後も品格のあるまちなみを維持するように住民もこの環境を守る意識、また、町会としましてはそれを応援して将来に向けて継続できるようなまちづくりをしていきたいなと思います。

高見澤 氏 ありがとうございます。最後に大塚部長。

大塚部長 今日、宿題を頂いたことは頑張っってやっていきたいと思ひます。そして荻外荘の今後のスケジュールについてですが、荻外荘をかうためにまちづくり交付金というのが26年度までの計画で補助金を入れて土地をかうしております。来年の26年度

の時に、南側部分の所を暫定整備する予定でございます。それが26年度までの計画で、次の計画が27年から今後申請して、上の方の建物の改修や、出来れば向こうから持って来られる可能性もあることも含めて事業を進めて行って、29年頃に全部完成するような、今のところそのような予定ですので、是非みなさまのご協力の程よろしくお願いいたします。

高見澤 氏 ありがとうございます。ある程度スケジュールが見えてきたということですね。29年度というと2017年、オリンピックが2020年なので、国際的なお客さんが見えた時に太田黒公園・角川庭園や荻外荘をどう分かってもらうか、そういう立場にたってみるというのも良いことかもしれませんね。あまり地域だけで閉ざされて考えていても、却って見えない所が出てくる。大変ありがとうございました。いつもながらこういう会議をやると、これからみんなで議論したいという所に終わらざるをえないのですが、ご勘弁ください。荻外荘の懇談会ですけれども、我々委員としても今日の頂いた意見は大変参考になりました。そういうことも含めて来年の2月か3月くらいにまとめをして、それをみなさんに読んで頂いて、さらに次の段階の検討に移り、2017年の完成に備えて行くということです。ですが、勝負は完成後に良い運営のなされることですね。段々に地元の人達が**関心のある**、あるいは杉並区民じゃなくても良いですし、専門的な方々も含めて運営に参加し、活用や管理が上手くいくように期待しております。

それでは、長時間にわたりましたが、ましたが、パネルディスカッションをこれで終わりとします。ありがとうございました。